

第34回麻布環境科学研究会 一般演題12

環境学習プログラムをESDに構成する—相模川での 自然体験活動の実践

○小此木 美咲¹, 小宮 菜摘², 村山 史世³

¹麻布大学生命・環境科学部環境科学科2年, ²武蔵野美術大学, 麻布大学生命・環境科学部環境科学科卒, ³麻布大学環境教育研究会 地域環境研究室講師

麻布大学環境教育研究会主催「親と子の自然環境セミナー2014」の実践について報告する。

本事業は、2004年以来毎年1回相模原市内の親子を対象に、相模川の大島川原をフィールドに生物や礫などを題材に自然体験活動するとともに、その体験を麻布大学でフィールドノートにまとめるという環境学習プログラムである。教員の指導のもと学生が主体的にプログラムを企画・実施している。本年度は11回目である。

「ESDのつくり方ワークショップ」で開発した手法を活用して、環境学習プログラムをESD（持続可能な開発のための教育）プログラムへと構成したことが本年度の特色である。

平成25年度環境省事業「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」の神奈川地域ESD普及・啓発事業として、麻布大学環境教育研究会が地域事務局となって「ESDのつくり方ワークショップ」を企画・実施した。ここで開発した環境学習プログラムをESDプログラムへと構成する手法とワークショップの結果については、小宮・小此木・村山「教育プログラムからESDプログラムを構成する一手法について」で報告した。このワークショップでESD化を図る素材となったのが、「親と子の自然環境セミナー2013」のプログラムであった。参加者50人を10班に分けて、「親と子の自然環境セミナー2013」のプログラムから持続可能な社会づくりの構成要素の抽出、各要素のつながりを構造化し、ESDとしての新たな期待目標を導き出すことに各班とも成功した。新たな期待目標は、「相模川が持続可能なように保全すること」および「相模川を持続可能に利用できる人を増やすこと」のよう

に、「川の保全」と「人材の育成」に大別された。

「ESDのつくり方ワークショップ」での成果物を参考に、スタッフは「親と子の自然環境セミナー2014」をESD化した。プログラム自体は昨年度とほとんど変わりはない。しかし、昨年度の反省点とESD的な観点からの修正点をプログラムにおいては加味した。主な反省点と修正点は以下の通りである。

- ① 目的に、「相模川の川原や生物・礫などについて、野外体験活動を通して親しむとともに、感じたことや見つけたことなどをフィールドノートに表現すること」に加えて「人と川のつながりをイメージすること」を加えた。
- ② 相模川全体と、私達と相模川の利用を想起できる講義を冒頭に実施した。
- ③ 生物や礫の採取だけでなく、観察や振り返り、思考を重視した。

プログラムは、8月24日（日）に実施した。参加者数は7組19人（内訳：小学生10人、保護者9人）に対して、大学生9人、教員1人であった。プログラムは事故なく安全に終了した。

参加者・スタッフアンケートをみると、いずれも満足度の高いプログラムであった。しかし、これはESDとして成果のあるプログラムだったかの検証は、今後の課題としたい。

ただ、スタッフにおいてはESDを意識することで、担当するアクティビティの準備・実施だけでなく、プログラム全体のつながり、参加者のマインドの変化、人と川のつながりなどを意識しながら企画の準備・実施ができた。プログラム自体は、昨年同様であるにも関わらず、「持続可能性」を志向することができた。